

『三国志』「東夷伝」中のいくつかの 漢字表記語の語源

遠 藤 光 暁

1. はじめに

本稿では『三国志』「魏書・烏丸鮮卑東夷伝」のうち「東夷伝」を中心とし、あわせて同時期・同地域を反映する『日本書紀』などの資料で漢字表記されたいくつかの人名・地名・官職名などの語源を論ずる。その中には倭人条（いわゆる『魏志倭人伝』）に倭語の記載もあり、日本語を表記した文献資料としては最古期に属することとなる。ただし、分析してみると、漢語や鮮卑語が倭語に入ったか、『三国志』が故意に漢字表記を卑字に置き換えた場合も一定数あるように見受けられる。なお、『三国志』の撰述年代である3世紀末は上古音の時代となり、洛陽標準音とは異なる日本列島・朝鮮半島・楽浪・帶方郡ないし鮮卑などの北方民族漢字音の方音的特質を帯びる可能性も常に念頭に置く必要がある。

以下ではこれまでの Endo (2021, 2023), 遠藤 (2022a, b, c, d, e, 2023, 2024a, b, 近刊 a, b), Endo et al. (2024) などの一連の考察と同様に個別例を収集することに主眼を置く。未だ草創期にあるため、音通例や語源の発見に重点があり、細かな音価の推定は相当数の例が蓄積された時点に譲ることとする。このような段階では可能性があれば挙げておく、というブレインストーミングが重要であり、それを篩い分けるのはその次の段階のこととなる。古代については用例が少なく、確実なことしか論じないという態度では先に進むことができず、あらゆる可能性を端から挙げていくという heuristic なアプローチが有利である。

『三国志』のテキストについては「中國哲學書電子化計劃」のデータを使い、先秦兩漢魏晉南北朝の用例の検索も同サイトに依る。以下の原文用例は同サイ

トからの引用であることをここでまとめて記しておく。ただし、標点は改めている場合がある。日本語訳を付ける際には井上ほか（1974）と田中（2009）を参照した。

2. 「加」

以下では解説ができた順に検討していく。クロスワードと同じく、一つ糸口がつかめると、それと連鎖して関連する語源も浮かび上がってくるからである。

「加」についてはまず夫余条で「國有君王，皆以六畜名官，有馬加、牛加、猪加、狗加、大使、大使者、使者。」（国には君王がいて、いずれも六畜によって官を名づけ、「馬加・牛加・猪加・狗加・大使・大使者・使者」がいる。）として出てくる。井上ほか（1974: 50）は「官職の名称はすべて六畜の名でよんでおり」と訳す。「皆」が意味的に「君王」を承けるとすると夫余国にたくさん「君王」がいることになるためだと思われる。田中（2009: 359）は「皆」を訳さず、文法的な解釈の誤りを犯すのを避けている。この「国」が夫余全体を指すのか、他の東夷諸国のように数十国が存在し、それぞれの部族国家に「君王」がいたのかが問題となるが、夫余条にはその辺の記述がない。

ここの「加」は「可汗 qayan」ないし「汗 qa'an」といった「王・長」を意味する鮮卑語に由来すると推定されている（田 1954, 1975, 李 1961, 1972）。「加」は夫余のほかに高句麗でも「相加」や「古雛加」がいたことが知られている。「相加」の「相」は小文第5章で触れる「徐」に相当し、全体としては「みやこの長」の意と解することができる。「古雛加」については高句麗条に「王之宗族，其大加皆稱古雛加。涓奴部本國主，今雖不為王，適統大人，得稱古雛加，亦得立宗廟、祠靈星、社稷。絶奴部世與王婚，加古雛之號。」（王の宗族は、そのなかの「大加」はいずれも「古雛加」と称する。涓奴部は本は国の主であったが、現在では王ではないものの、嫡子の系統の大人は「古雛加」を称することができ、宗廟・祠靈星・社稷を立てることもできる。絶奴部は代々王と婚姻しており、「古雛」の称号を加えている。）とある。この「古」は上古

音では a の母音であり「加」を表すと考えてよく、「雖」は中期朝鮮語の s な
いし上代日本語の「つ」に相当する連体助詞と解され、「古雖加」は全体とし
ては「王の王」となり、「大加」や宗廟・祠靈星・社稷を立てることができる
という都相当の長を表すものとして正に意味が合う。ちなみに、奈良の「春日
かすが」も同じ語源に由来すると考える。

倭人条では「加」という字は用いないが、同じ単語が現れていると私は考え
る。それはまず「卑弥呼」の「呼」であるが、尾崎（1969）と長田（1978）は
共に「卑弥呼」を「ヒムカ」と読み、それより先に松本（1966）が出してい
た、8 世紀の日向国ではない九州のどこかにあった国の巫女であった、とする
のと同じ説を出している。その理由としては『三国志』は 3 世紀の文献であり、
漢音・呉音や朝鮮漢字音のような唐代音に基づく中国語音韻史上の中古期
の発音を当てはめるのではなく、上古音を当てるべきことがまず挙げられる。
上古音では「呼」の属する上古魚部の母音は a 類と推定される。

ところが、森（1985）は漢末・三国には既に魚部の音価が中古音よりの o に
傾いていた（国際音声記号では [ɔ]）とする有坂秀世の説を引きつつ、他の証
拠も追加している。森（1982: 186-187）には『魏志倭人伝』の中古音の韻の枠
組みで整理した「音訳漢字」の表が掲げられており、全 146 字の中で遇摂字が
39 例（26%）となり、止摂字の 44 字（30%）に次いで多い。3 世紀に最も近
い上代日本語の母音の頻度が分かるとよいのだが、ここでは松本（1988）の掲
出する現代日本語の母音の頻度を引くと、a: 29.86%, e: 11.47%, i: 21.62%, o:
28.25%, u: 8.80% となっている。中古の止摂字は i の類の母音であり、遇摂字
は上古の魚部に由来し、現代日本語の母音頻度数と比較すると o と a の両方に
近い。しかしながら、遇摂字が日本語の o に相当したとすると、a に相当する
字は中古音の果・仮摂の 17 例と倭・華・獲・末の各 1 例など約 21 例（14%）
のみとなってしまう、不自然な感を否めない。

これについては、東夷伝に見られる音写語が対音なのか漢字音なのかという
問題が関わる。対音とはある時代の中国人が自分の方言ないし標準音に基づい
て近似的に外国音を表したものであり、漢字音とは中国語の単語が外国語の中

に借用され、その外国語の音韻体系の枠組みに当てはまるように変形されてその言語内に定着した単語の発音となる。もし「卑弥呼」が対音による音写だとしたら「呼」という曉母字がk-に当てられていることが問題となるが、漢字音だとしたら当時の日本語には牙音k-系と喉音h-系の対立がなかったため、「呼」が既にk-で発音されていたとしても不思議ではない。弥生末に北部九州で既に漢語借用語が日本語に入っていたかは更に考えなければならないが、楽浪・帯方郡の官吏層の代表格である王氏は倭系言語を話す濊系であり、伊都国に常駐していた楽浪・帯方郡の使者も首席はともかくとして書記に携わった胥吏は濊系である蓋然性が高い。濊族は夫余の基層もなしており、夫余は東夷の中で最も早く漢文化を受け入れているので、その言語の中に多くの漢語借用語を受け入れて漢字音が形成されていても不思議ではない。

一方、伊都国の副官の「泄謨觚」と「柄渠觚」および奴国の官の「兕馬觚」の「觚」も「加」として私は考える。この場合、「觚」は見母であるから頭子音の問題はもともと存在せず、韻母のほうは上古魚部である。すると「加」は「王、長」という意味であるから、「泄謨觚」は志摩の官、「柄渠觚」は福岡・早良のほうの平群の官、「兕馬觚」は奴国の官となり（「兕馬」の該当する単語については下の第4章で扱う）、官名の末尾につく語としてふさわしい。このような「倭人伝」内部の並行例もあるので、『魏志倭人伝』における魚部の音価はaであるとして差し支えないものとする。

3. 「日」

前章で出た「卑弥呼」の「卑」の該当する語は「日」（すなわち太陽）であることは異説がないが、「弥」については江戸時代以来、「御」だとする新井白石説と「女」だとする本居宣長説が並立してきた。これについては、狗奴国の男王の「卑弥弓呼」とも関わる。もし「卑弥呼」だけなら「日+御子」と解釈できそうだが、「弓」が「子」を表すとする「呼」が浮いてしまい、白石説に不利になる。宣長説に沿って第2章の解釈も加味して語源を解くと「姫+子+加（王・長）」となり、「女王の子である王」という意味に取る余地がある。

いずれにしても、「彦・姫」の語源が「日＋子 or 女」であることは問題なく、「太陽の子ないし娘」で、王を表したことになる。それを更に遡った段階では「日」だけで「王」を表したことも想定できる。「(民族の) 太陽」だけで当該民族の指導者が表せるが、同音異義語となるので、それを避けるために「子」や「女」を付けたこととなろう。

徐福の本来の表記は「徐市」であり、この「市」は「不」であり、「否」に通じる。その出身地とされる琅邪郡には不其県があり、周等（1986: 158-159, 2015: 198-199）は漢族の地名では否定詞を使わず、濊族の地名であるとしている。遠藤（2024a）は「不」が日本語の「日」に相当すると解釈した。ここから更に、「徐市」の「市」も日本語の「日」に相当し、その意味は「王」であると考える。『三国志』韓伝の引く『魏略』には秦の朝鮮王である「否」がいて、その子が箕子朝鮮の「準」であるとしている。この名前も否定詞であるから漢族の名前ではなく、日本語でその語源が解ける。

また、「日ひ」は「太陽の方角」ということで、東ないし南を表す用法もある。まず日本語の「ひがし」自体が「ひ+むか+し」つまり「日の向かう（その方角の）風」に由来する。「し」が「風」の意味であることは「嵐あらし」が「荒+し」つまり「荒い風」に分解されることから分かる。「風」によって方角を表すことからして、この語は元は海を航行する者たちによって作られたものかもしれない。日本人にとっては太陽の方角というと太陽の昇る東を指すことは自明のように感じられるものの、中国では南を指すようである。朝鮮語で「前」を *aph* と言い、それは中期朝鮮語の *arp* に遡る（つまり *rp > ph* の変化が生じた）。継体紀 21 年条の「南加羅」に「ありひし」とふりがながあり、「し」は朝鮮語の「～の」を表す *s* に相当し、「ありひ」が中期朝鮮語の *arp* に相当し、「倭あ+夷り+日ひ」すなわち「和人の南」という漢語+和語から朝鮮語に借用されて「前」に意味変化したこととなる。これは朝鮮人が中国と同じく太陽の方角が南だと考える違いに依るものであろう。

神功紀五年条には「襲津彦…拔草羅城還之。是時倅人等、今桑原・佐廩・高宮・忍海、凡四邑漢人等之始祖也。」とある。これは葛城襲津彦が草羅（現在

の慶尚南道梁山)から連れてきた捕虜などが奈良県西南部の葛城市に定着して4つの村をなしたことを伝えるものだが、「桑原」の「桑」が音読みとすると「草羅」に相当し、本論文第5章で触れるように「徐さ+原はら」で「都」という意味になる。「佐麿」については、坂等(2011: 21)が御所市の鴨神遺跡のあたりと推定しており、もしその北の室宮山古墳の見下ろすあたりが葛城襲津彦の領地の中心地の「桑原」であったと考えられるならば、その真南に位置することとなる。「佐麿」は「徐さ+日ひ」と分析でき、位置関係からしてこの場合の「日」は東ではなく南を意味し、「都の南」と解される。上の引用で朝鮮半島から連れてきたのに「漢人」とあるのは注目されるがこれについては別文で詳しく論じたい。

『魏志倭人伝』の帯方郡から南に一万二千里という記述をそのまま受け取ると赤道に行ってしまうことは有名である。楽浪・帯方郡の使いは伊都国に常駐し、奴国あたりまでは自分でも行ったことがあるので、方角を正確に把握したが、伝聞による地名については「ひむかし」つまり「太陽の向かう方向」と倭人が表現したのを漢人が誤解した可能性がある。

4. 「馬」

『魏志倭人伝』には「景初二年六月、倭女王遣大夫難升米等詣郡、求詣天子朝献、太守劉夏遣吏將送詣京都。」とあり、この大夫の難升米は計7回現れ、卑弥呼の5回よりも多いくらいである。洛陽で魏の明帝・曹叡に謁見して、武官である率善中郎将の位を与えられている。また、黄幢も与えられていて、これも魏の軍隊の指揮をする旗である。

さて、もともと「難升米」という文字面を見ると和語を表しているものではなさそうだがということが中国語音韻史が専門の者には直ちに感じられる。何故かと言うと、中国音では「難」は -n, 「升」は -ng, 「米」は -i でそれぞれ終わり、そのままの発音だったとすると和語の基本的な音節構造である「子音+母音」から外れ、その後に更に子音ないし母音が連続することになるからである。

一方、『三国史記』地名・人名を表記する漢字音を見慣れた目からすると、

遠藤（2022b）で記したように末尾音が脱落するのが基本なので、現在「なんしょうまい」と平行して「なしめ」と読むことが広く行われているのは当を得たものと感じられる。この読み方を考案した人を突き止めることができずにいるが、この発音に到達し得たならばその語源もそのすぐ先にある。つまり「な」をさしあたり除くと、「しめ」のほうは奴国の官である「兕馬觚」の「兕馬」と同じ単語を表し、そして武官なのであるから、それが漢語の「司馬」だとする解もただちに浮かんでくる。しかしながら、魏王朝からすると「司馬」という帝国全体の將軍という非常に高位の武官でもあり、魏の名門貴族である司馬氏と同じ呼称・用字を東夷のはずれの倭の部族国家の長ごときに使うのは甚だ不釣り合いであるから、少し音を変えて濁音の「兕」（水牛に似た一角獣）という獣を表す漢字に変えて戯画化して蛮族であることを明示しようとしたというのも東夷伝全体の用字法からして不思議ではない。

「難」は末尾音の -n が無い「な」であるならば、「奴国」の「奴」に正に当たり、それは「那珂遺跡」の「那珂」の「か」が脱落したか、「奴」の後に王を表す「加」が付加されたかどちらかであろう。前者である場合は、北部九州の中央の国、という意味であろう。東（2012: 212-220）は黒塚古墳で黄幢と見られるものが出土したことを有力な根拠として難升米の墓かと推定している。当時数十とあった部族国家の中でも朝鮮半島に近い最有力国の奴国の將軍が遣使され、没後はヤマト共立政権の近くに葬られたこととなる。

また、対海国（ふつう対馬国と校訂されている）・一大国（ふつう一支国と校訂されている）・奴国・不弥国の副官として「卑奴母離」があり、これまで「鄙守」と解釈されてきたが、「日ひ＋な（連体助詞、「まなこ」＝「目ま＋な＋子こ」の「な）」＋馬もり」と読む可能性もあり得る。「母」は上古之部、中古厚韻で平行例が少ないため母音を推定するのが難しいが、上古之部の主母音を各家はəと推定している。馬はモンゴル語では morin であり、中期朝鮮語では mar で、a で翻字された母音はアレアで、円唇性を伴ったと言われるので、さしあたり「もり」と仮名書きしておく。「馬」は日本呉音では「メ」、漢音では「バ」、慣用音では「ウマ」のように r の要素を反映していないが、最早期

日本漢字音ではrの要素を表していた可能性もあり得る。語源としては、対海国・一大国の大官の「卑狗ひこ」つまり「日ひ+子こ」の「日ひ」が「太陽祭祀を司る神聖王」であるのに対して、その「太陽神の子としての王の配下の將軍、つまり馬を司る武官」という意味であると解することができる。こうした「馬」を語源とする官は夫余の「馬加」も含め、中国の制度下に入れば幕僚としての位置づけとなり、王が指揮するものであったこととなる。

不弥国の官の「多模」は「都（た、語源は第6章参照）+馬」、邪馬壹国（ふつう邪馬臺国と校訂される）の官の「伊支馬・彌馬升・彌馬獲支」の「馬」も「馬を司る武官、將軍」の意味である可能性を考えている。

日本に馬の実物がもたらされた物証があるのは4世紀末から5世紀だとされているが、橋本（2002）は箸墓古墳の後円部の裾における第109次調査で木製の輪鐙が出土したことを報じている。布留1式期（4世紀初め）のものである。倭国からは弥生時代にも朝鮮半島や中国大陆との往来があり、馬の実物にも接していて、騎馬戦がゲームチェンジャーとなる最先端の戦法であることは周知の上で「司馬」といった武官名を採用していたこととなろう。

5. 「徐」

「徐」が殷代の「徐」国に由来し、「祭祀を行う所・みやこ」であると考えられることについては遠藤（2024a）に記した。ここでは更にそれによって解ける別の例を追加しておきたい。

まず、高句麗の最初の都である「卒本」は現在の遼寧省本溪市桓仁に比定されているが、この「卒」は「徐」に相当すると考える。「徐」のBaxter-Sagart（2014）による上古音は *sə.la であり、「卒」の韻尾は上古音でも中古音でも -t に終わるが、朝鮮漢字音のように -l に変化していたか、-t により r に対する近似的な音写字を当てたとするならば、この上古音形にかなり近い発音であったことになる。そのほか、-t が脱落していた可能性もある。「本」のほうは梵語の pur「砦」に当てたものと考えるが、pur については遠藤（近刊 b）で論じてある。桓仁の五女山城は正に砦と呼ぶのにふさわしく、「卒本」は全体として

「祭り事を行う砦」と解される。もう一つの呼称の「忽本」の「忽」についてはやはり遠藤（近刊 b）で触れたように白鳥庫吉のようにモンゴル語の「khot 城」に当たると解するのがよい。もう一つの別名「紇升骨城」の「紇」は「加」すなわち「王」,「升」は「徐」で「みやこ」,「骨」は「khot 城」となり,「王都の城」と解することができ,更に「城」が付くのは漢人が「紇升骨」の語源が分からなかったため更に後に付したもので,朝鮮の古地名ではよくこのように同じ意味の言葉が重なることが見られる。また,梵語の借用語が朝鮮半島に入ってきた経路については,南部沿岸経路と北部大陸経路の可能性が考えられるが,遼寧省に pur 地名があることから内陸経路の蓋然性が高いものとする。

「徐」の上古音が *sa.la であることから,慶州の舍羅里遺跡の「舍羅」と咸鏡南道永興の所羅里土城の「所羅」もその発音を保存した地名であると考えられる。舍羅里遺跡は無文土器時代から三国時代まで続く遺構であるが,金城・月城に篡奪される前のみやこがあったところとしてこの地名の由来も原三国時代に遡る可能性があろう。新羅の始祖である赫居世の国号も正に「徐羅伐」であり,現在に至るまで慶州の地名として継承されている。辰韓六部の「沙梁部」も同じ語源である。また所羅里土城については,田中(2009: 323-4)が池内宏による不而県城説と李丙燾による領東七県の華麗県説が決着を見ていないとする。いずれにしても原三国時代の県レベルの「みやこ」があったことになる。またここは魏の時代の濊族の中心地域であった。

6. 「郡」に相当する「都」

継体紀 7 年条に出てくる「帶沙」という地名の語源を考えていて,「沙」は第 5 章で触れた「徐」で解けるが,「帶」は同一地名に現れる以上は異なる語とする必要があり,そこから歯音 s と舌音 t が対立している音韻体系に基づく地名であるとすべきだと考えるに至った。そこで Endo (2023: 16, fig. 9) の日本書紀に現れる任那地名の地図では sa, so 系の字と ta 系の字には別の記号で表示してある。しかし,その時点では ta の語源は分からなかった。

その後、遼寧省朝陽市の袁台子遺跡に行き、ここが戦国時代の燕国の「西城都」、漢代の「柳城」であることから、「都」に国都より小さなレベルの中心城邑を指す用法があることを知った（后等 2007, 后 2012）。ちなみに、遼西は近年日本人の源郷とされる地域であり、袁台子で琵琶形銅剣とともに多鈕粗文鏡が出ており、その雷文は神社の注連縄についている紙垂の起源になるものと考えている。注連縄自体、袁台子のある十二台営子で出土した「双虺糾結銅具」のイメージと同じく水を司る龍の元となった蛇の交尾の様をかたどり、稲の時期の雨をもたらし雷も龍の化身であり、神社の手水舎も龍の形になっている。

さて、「都」は Baxter-Sagart の上古音では *tʰa であり、呉音でツ、漢音でトだが、古韓音相当ならばタが期待される。これによって解読できる一連の地名・人名がある。

「玄菟郡」は「玄」が末尾音を反映せず、牙音と喉音が通用するならば「加」にあたり、「菟」は「都」にあたる可能性がある。全体としては「首長の郡」というありきたりの語源となる。

また、高句麗の建国の祖である朱蒙はいろいろな表記があり「都慕」もあることからしてももとは鼻音韻尾がなく、*tama のような発音だったであろう。その語源は「都の馬」、つまり「郡の將軍」という官職名となる。倭の不弥国の官である「多模」も全く同じ意味の語として解くことができる。

日本で多鈕細文鏡の出た大県遺跡のある堅下の堅は「加+都」と分析でき、「王・長の領地・郡」という意味だと解することができる。

7. 「倭」

さて、最後に「倭」の語源を取り上げよう。『時代別国語大辞典上代編』の「わ〔吾〕」の項目では「わが国が、上代において中国大陆の人々から「倭」の名で呼ばれたのは、日本人が自らのことを一人称の代名詞ワで呼んだことに起因するのではないかという釈日本紀以来の一説があり…」としている。

和多都美神社は安曇氏の神社であり、ワとアの通用が見られる。『時代別国語大辞典上代編』の「あ〔我・吾〕」の項目では「アレ・ワ・ワレと同類の一

人称代名詞。ア・ワに接尾語レがついて、アレ・ワレができた。アガとワガと、それぞれ接する語に差があり、…（例は省略、引用者）ア・アレはワ・ワレにくらべて、単数的・孤立的な意のものだとする説もある。」としている。「和多都美」は前章の議論からして、「和（われ）＋多（都＝領地）＋都つ（連体助詞）＋美（み＝水、ないし上代日本語の母音連続回避により「海」の「う」が脱落）」と分析でき、「わが領地の海」と解することができる。「安曇」は「安（われ）＋つ（連体助詞）＋水ないし海」と分析でき、「わが海」と解することができる。

福岡市早良区の「有田遺跡」は今では住宅地の一角にその面影が残るに過ぎないが、もとは早良国の都であったと考えられる。「有田」は「倭あ＋夷り＋田（都＝領地）」と分析でき、「夷」が「り」となっているのは Baxter-Sagart (2014) の上古音で *laj と再構され、l- があるのを反映するものと考ええる。全体としては「倭夷（＝濊）の領地・くに」という意味に解することができる。「早良」自体が「ソウル」と同じ「みやこ」という語源で解することができることについては遠藤（2024a）で触れた。吉武高木遺跡の「高木」は「都（領地）＋加（王・長）＋城」と分析でき、「国王の城・みやこ」と解することができる。このように遺跡のあるところの地名は往々にして朝鮮半島・遼東と同じ語源で解することができる。

「和田」という地名が金海から始まって西日本の沿岸部にくまなく見られることについては遠藤（近刊 a）で触れたが、その語源も「我＋都（領域）」、つまり「われわれの土地」という意味で解くことができる。

この「わ」ないし「あ」はそもそもは漢語の「我」に由来する可能性がある。『三国志』辰韓条に「名樂浪人為阿殘；東方人名我為阿，謂樂浪人本其殘餘人。」（樂浪の人のことを「阿殘」と名付け、（馬韓から見た）東方の人、つまり辰韓の人は「私」のことを「阿」というので、その意味は樂浪人はもともとは辰韓の残りの人だということである。）これは辰韓人の由来を述べた文脈の中にあり、秦の動乱から逃れてきて樂浪を経由して辰韓に来たことを述べたもので、漢語の「我」の頭子音が脱落して「阿」となったことになろう。日本

語の一人称はその形の漢語を借用した可能性があることになる。これについては辰韓に漢人の入植地があったことを論ずる必要があり、別稿に譲りたい。

8. おわりに

以上ではこれまでの拙稿で簡単に触れたことがある語も含め、更に適用範囲がある具体例について述べてきた。いずれにしても日本列島・朝鮮半島・遼東や更にその先の地域までを視野に入れ、関連する考古学・古代文献史・遺伝学の研究を考慮しつつ全般的・体系的な論述が必要であり、小文はそのための準備作業となるものであった。

謝辞

この論文は青山学院大学経済研究所 2023 年度短期研究および科研費 JP23K25322 による研究成果の一部である。

文献

- 東潮 2012 『邪馬台国の考古学』 東京：角川学芸出版。
- 坂靖・青柳泰介 2011 『葛城の王都』 東京：新泉社。
- Baxter W. H. and Sagart L. 2014 Old Chinese reconstruction, version 1.1. <https://ocbaxtersagart.lsa.it.lsa.umich.edu/BaxterSagartOCbyMandarinMC2014-09-20.pdf>
- 田鳳徳・李丙洙訳 1954, 1975 「扶餘や高句麗の官名「加」について」 立教大学史学会『史苑』35 (2), 43-56; ソウル大学校『法学研究』1 (1) 原載, 1954 年; 『韓国法制史研究』, 241-256, ソウル大学出版部, 1968 年。
- Endo, M. 2021 Geographical distribution of certain toponyms in the *Samguk Sagi*, *Anthropological Science*, 129 (1) : 35-44.
- 遠藤光暁 2022a 「中国語上古音の最近の推定から見た本邦最古の漢字音」『岩波講座世界歴史 6 中華世界の再編とユーラシア東部 4～8 世紀』290-291, 東京：岩波書店。
- 遠藤光暁 2022b 「最古期日朝漢字音における末尾音の弱化・脱落」『青山経済論集』73 (4) : 157-164。
- 遠藤光暁 2022c 「『三国史記』地名漢字の通用例に反映した清濁合流の地理分布」『経済研究』14, 59-69。
- 遠藤光暁 2022d 「日朝最古層漢字音所反映の上古方音札記」『方言比較与呉語史研究』126-130, 上海：中西書局。
- 遠藤光暁 2022e 「日本最古層漢字音簡論」『「訳音対勘」的材料与方法』60-66, 合肥：黄山書社。
- 遠藤光暁 2023 「於羅瑕と韃吉支」『青山経済論集』74 (4) : 33-56。

- Endo, M. 2023 A Study of Three Korean Family Names: Kim, Seo, and Baek, *Proceedings of the fifth International Conference on Asian Geolinguistics*, 12-20.
- 遠藤光暁 2024a 「古代日本語の中のいくつかの人名・地名の語源—考古学と DNA の特徴と関連して—」『季刊考古学』166: 44-47。
- 遠藤光暁 2024b 「いくつかの朝鮮古代地名の語源をめぐって」『経済研究』16: 87-102。
- 遠藤光暁 (近刊 a) 「言語分野の概論」。
- 遠藤光暁 (近刊 b) 「朝鮮半島における諸言語話者集団の地理分布—5 世紀前後を中心として—」。
- Endo, M., Suzuki, H. and Fukushima, C. 2024 Geographical Distribution of Animal and Crop Terms in Asian and African Languages, In: Osada, N., Kumagai, M., Suzuki, H. and Endo, M. eds. *Phylogeographic History of Plants and Animals Coexisting with Humans in Asia*, 181-207. Singapore: Springer Nature.
- 橋本輝彦 2002 「纏向遺跡第 109 次出土の木製輪鏝」『古代武器研究』3: 82-83。
- 后晓荣、陈晓飞 2007 《考古出土文物所见燕国地名考》『首都师范大学学报（社会科学版）』2007 (6) : 34-37。
- 后晓荣 2012 《燕国县级地方行政称“都”考》『首都师范大学学报（社会科学版）』2012 (6) : 25-28。
- 井上秀雄ほか訳注 1974 『東アジア民族史』1, 東京: 平凡社。
- 李基文 1961, 1972 「高句麗の言語とその特徴」『韓』1 (10) : 3-35。
- 松本克己 1988 「印欧語の母音組織」『言語』17 (2) : 87-91。
- 松本清張 1966, 2017 『古代史疑 増補新版』東京: 中央公論社。
- 森博達 1982 「三世紀倭人語の音韻」, 森浩一編『倭人伝を読む』, 155-195, 東京: 中央公論社。
- 森博達 1985 「『倭人伝』の地名と人名」, 森浩一編『倭人の登場』, 157-188, 東京: 中央公論社。
- 長田夏樹 1978, 2001 「卑弥呼の訓み方」『長田夏樹論述集 (下)』所収, 608-615, 京都: ナカニシヤ出版。
- 尾崎雄二郎 1969, 1980 「日本古代史中国史料の処理における漢語学的問題点」『中国語音韻史の研究』所収, 262-288, 東京: 創文社。
- 田中俊明 2009 「『魏志』東夷伝訳注初稿 (1)」『国立歴史民俗博物館研究報告』151: 357-438。
- 周振鶴・游汝傑 1986 『方言与中国文化』上海: 上海人民出版社; 内田慶市・沈国威監訳 2015 『方言与中国文化』東京: 光生館。